≪随　想≫ 人間担任（その４）

教え子たちの追憶

教育相談部　坂本善一

たそがれの庭先に，灯ろうの火がポッとともって，故郷のお盆です。

折から，帰省中の，そして地元にいる，もう四十路に手のとどきそうな教え子たちと，彼らの小学生時代をしのびました ── 盆踊りの太鼓の音が遠くに聞こえる縁先で── 。

＊

「とってもきれいでした……先生の肩車で眺めたあの夕焼けが…。」と，あどけなかったころの面影を浮かべながらＮ子は思い出をたどります── ──あれは，初秋。閉門まぎわのの校庭で，友だちや先生は“都遊び”に夢中。やがて閉門を告げる鈴の音。遊びの輪がとけて，校庭は静まりかえりました。石南花色に暮れかかる校庭の砂場に，私はポツンと一人。“てなし子”とみんなにいわれて悲しい，母と二人暮らしの私。先生は，やおら，この私を肩車にして夕焼けの中にたたずみました。私は，土と汗にまみれた両手で，先生の額にしっかりつかまりました。いつとき，先生も私も，ただだまって，あかね雲を見つめ，夕焼けに染まっていました。そして先生は，ふりかえり，ふりかえり馳けて帰る私の後ろ姿を，つじ陰に消えるまで見送ってくれました。

＊

「先生におねしょをひっかけちゃって……なんとも恥ずかしくて…。」と，てれながら，童顔をのぞかせてＦ男は追憶します ── それは，宿泊訓練のときのこと。降るような星空の下，友だちとかわるがわる天体望遠鏡をのぞきました。やがて車座になってキャンプファイヤー。友だちのどの顔も，どの瞳も，炎に輝いていました。いつしか炎が鎮まって四周には夜のとばり。教室の床にござを敷き，毛布にくるまって，三三五五ゴロ寝。俺はじゃんけんに勝って，先生と隣り合わせ。先生のおとぎ話を，夢うつつに聞きながら，いつしか夢路をたどりました。

夜明け近く，先生は腰のあたりに“湿気”を感じて目を覚ましたらしい。「ヤッタな……？Ｆ男のヤツ…」── 先生はそんなことをつぶやきながら，ねぼけ眼の俺を抱いて隣りの部屋へ忍び足。予備のパンツにはきかえさせてくれて，またひと寝。やがて鈴の合図で起床。ところが，ござを通してできたおねしょの染み。これだけはみんなに隠しようがないと思ったのでしょう，先生は笑いながら，「この染みは，先生とＦ男の大汗だ！」と一声。この一声に，教室中がドッと笑って，あとはみんな，米をとぐ者，菜っ葉をきざむ者……と，それぞれの持ち場へ。俺は先生といっしょに得意の“火男”の役につきました。

＊

「はるかな那須山にはもう雪。この辺りにも，もうまもなく雪が降るのでは……というのに，俺の家ではまだ畑の豆引きもしてなかったし，稲の脱穀もしていなかった…。」と，相変わらず口が重くボソボソと話すＭ男。長男で地元にいるＭ男が今でもはっきり覚えているという，それは ── あのころ，母ちゃんは４人目の赤ん坊を産んだばかり。父ちゃんは疲れで臥せっていました。俺は，朝晩の炊事，妹や弟の世話。それで，４，５日学校を休んでいました。そんなある日の放課後，友だちや先生が，みんなで来てくれて，豆引き，稲運びの手伝い……助かりました。

＊

そのころ，私は，若気の至りで，この子供たちには随分厳しくもしたし，叱りもした。しかし，そのことは先生の手前，話題にはしなかったらしい。それにしても，ぼうとかすむ記憶をたどりながら語られる教え子たちの追憶は，どれもこれも“子供と先生との人間的なふれ合い”の話題に集中しているから，不思議です。